



共に感じること : 対人的な相互作用における交差に関する理論的研究

著者	岡村 心平
雑誌名	Psychologist : 関西大学臨床心理専門職大学院紀要
巻	7
ページ	29-38
発行年	2017-03-18
その他のタイトル	Co-feeling : A Theoretical Study of Crossing in Interpersonal Interaction.
URL	http://hdl.handle.net/10112/11325

共に感じること： 対人的な相互作用における交差に関する理論的研究

Co-feeling: A Theoretical Study of Crossing in Interpersonal Interaction.

岡村心平

関西大学大学院心理学研究科

Shimpei OKAMURA

Graduate School of Psychology, Kansai University

◆要約◆

本論文では、対人的な相互作用における交差に関連する「共に感じること (*co-feeling*)」という概念をめぐる、理論的な検討を行った。まず Gendlin (1995) の記述する対人的な相互作用における交差の特徴と、その説明の中で引用される Gilligan and Wiggins (1987) の「共に感じること」という概念を取り上げ、この概念が従来の心理学的な「共感」概念と対比的に用いられており、そこに同一化が含まれるか否かの相違があることを示した。また、この「共に感じること」という概念がクンデラの小説『存在の耐えられない軽さ』から採用されたもので、「同情」という語のパラフレーズとして使用されていることを概観した。次節では、心理療法における共感概念、特にロジャーズの「共感的理解」とフロイトによる「共感」に関する記述を参照し、「共に感じること」との比較検討を行った。フロイトは共感を「同一化」と関連づけ論じており、一方でロジャーズの共感的理解と「共に感じること」は、同一化に基づかない点で共通していることを提示した。また、共感的理解の特徴である“as if”という性質は、「A をあたかも B であるかのように」理解するというメタファーにおける交差の機能やその仮想性にも見られ、この点においても、ロジャーズの共感的理解と、ジェンドリンの交差概念や「共に感じること」という概念との間に共通点が見出された。

キーワード：交差、共感的理解、同一化、「あたかもかのように」という性質、メタファー

Abstract

In this paper, the author presents a theoretical study on the concept of co-feeling related to crossing in interpersonal interactions. First, the characteristics of crossing in interpersonal interaction described by Gendlin (1995) and the concept of co-feeling in Gilligan and Wiggins (1987) that Gendlin quoted in his footnote, are reviewed. These concepts are contrasted with the concept of empathy in conventional psychology, and a difference is pointed out on whether iden-

tification is included or not in these concepts. Moreover, the concept of co-feeling as quoted from Kundera's novel, *Unbearable lightness of being*, is introduced; this was a paraphrase of the word "compassion" in that novel. In the next section, empathy in psychotherapy, especially Rogers's empathic understanding and Freud's description about empathy, is compared with co-feeling. The author argues that Freud connected empathy with identification; on the other hand, Rogers's empathic understanding and co-feeling have a commonality in that they are not based on identification. In addition, the "as if" quality, which is a characteristic of empathic understanding, is also observed in the functioning of crossing in metaphor and its manner of understanding "A as if it were B" and the virtual condition of metaphorical understanding. Thus, it is possible to observe a commonality among Rogers's empathic understanding, Gendlin's crossing, and co-feeling.

Key Words: crossing, empathic understanding, identification, as if quality, metaphor

I はじめに

私たちが時として、誰かに話を聞いてもらうことを切望するのはなぜだろう。このような問いは、カウンセリングという行為やその制度の根本的な存在理由にも関わりうるものである。ユージン・ジェンドリン (Eugene Gendlin) は論文 "Crossing and Dipping (Gendlin 1995)" の最後のパラグラフにおいて、この問いに関して以下のように論じている。

We can understand each other across different experiences and different cultures, because by crossing we create in each other what neither of us was before. Communication and making sense does not rest on pre-existing commonalities, as if we can understand only what we already know. Nor is it misunderstanding and distortion. Rather, when we are precisely and exactly understood, that is when we are most eager to hear how it has crossed in the other person. Crossing creates something in the others that is new to them and to us. That is why we like to hear their reactions (Gendlin 1995).

必要に応じて訳出しながら解説していこう。「私たちは、お互いに異なった体験、異なった文化を超えて理解しあうことができる」という一節に続き、ジェンドリンは「むしろ、私たちが精密に、そして正確に理解される時というのは、そのことがどのように他の誰かに交差されたか、それを聴くことを最も切望するときである」と記述している。誰かに何かを伝え、その反応を聴くことで、私たちはより精密に、かつより正確に、自分の体験を理解することができる。このような相互作用を、ジェンドリンは「交差」(crossing) と呼ぶ。

最後の「交差は、他の者たちの中に、彼らや私たちにとって初めてとなる何かを作り出す。これが、私たちが彼らの反応を聴くのを好む理由である」の一節で、本論文は結ばれている。誰かに何かを伝え、その反応を聴くことは、いわゆる「伝言ゲーム」の答え合わせのように、自分の言ったことが他者に正確に伝わっているかを確認する作業ではない。それは自らだけでなく、話を聴いたその誰かにとっても新しい「何か」を作り出すことであり、だからこそ、私たちは誰かの反応を好むのだ、とジェンドリンは記述する。実は、この最後の "That is why we like to hear their reactions" という一節には脚注 (原註4) がつけられている。「私たちが誰かに話をすることを好む理由」。本論文は、ジェンドリンがこの一文に付けた脚注をたどることか

ら、議論を始めることにする。

Ⅱ 対人的な相互作用における交差： 「共に感じること」をめぐる

1. 「共に感じること」と「交差」

まずは Gendlin (1995) の原註 4 を引用する。以下がその全文である。

Gilligan argues against Hoffman's assertion (the usual one) that "one can feel another's feelings only to the extent that the other's feelings are similar to one's own." Gilligan says that "Considered on a theoretical level, co-feeling, however morally desirable, would seem to be psychologically impossible." Then she cites many findings that "co-feeling implies that one can experience feelings that are different from one's own." We see here the grand error of most Western theories—the assumption that all cognition must consist of *pre-existing* patterns or units. All about us we see novelty instead. That certainly includes the *crossing* when two people interact (Gendlin 1995).

まずは概略を確認しよう。Hoffman (ホフマン) によるよく知られた「人間は他者の感じがその人自身の感じと類似する範囲でのみ、他者の感じていることを感じられる」という仮説に対する、Gilligan (ギリガン) による反論が引用される。ギリガンは「理論的な段階で考えれば、共に感じること (co-feeling) は間違いなく望ましいことであるにも関わらず、心理学的には不可能であると思われる」と指摘する一方で、「共に感じることは自分自身の体験とは異なる感じを体験できるということを含む」ことに関する数多くの研究成果を提示しているという。ホフ

マンが前提する「あらゆる認知は、前もって存在する (pre-existing) パターンやユニットから成り立たなければならない」という西洋の理論仮説の多くに当てはまる発想を、ジェンドリンは重大な誤りだと指摘する。その代わりに、ジェンドリンは新奇性 (novelty) という特徴をそこに見出しており、この新奇性は「2人の人間が交流する際の交差 (the *crossing* when two people interact)」に含まれているという。

つまり、この脚註の前半はギリガンによるホフマンへの反論であり、他者が感じていることを感じようとする際に、自分自身の感じと類似していること、そのような類似性が「前もって存在する」ものに基づいており、その類似性の範囲内でのみ他者の感じていることを捉えることへの批判である。後半は、ジェンドリンが「共に感じることは、自分自身の体験とは異なる感じを体験することを含む」というギリガンの主張に賛同しながら、対人場面における新しさの動因として「2人の人間の交流における交差」を取り上げている。この「共に感じること (co-feeling)」という表現は、いかなる意味なのだろうか。次にギリガンやホフマンの主張を、その引用元の論文を追いながらさらに確認していこう。

2. 「共に感じること」と「共感」

ここでジェンドリンがギリガンの論述として引用している論文は、実際には Gilligan and Wiggins (1987) の共著論文 "The Origins of Morality in Early Childhood Relationships" である。この論文は、倫理観の発達における「正義感指向 (justice orientation)」と「ケア指向 (care orientation)」という2つの視点について実証研究を幅広く参照しながら論じられているものである。幼児の共感能力に関する多くの実証研究を参照するなかで、ギリガンとウィギンズはホフマンの論文の取り上げ "Hoffman (1976) suggests that one can feel another's feelings only to the extent that the other's feelings are similar to one's own (Gilligan and Wiggins 1987,

p.289).”と指摘する。ここでギリガンとウィギンズが引用しているのは“Empathy, Role Taking, Guilt, and Development of Altruistic Motives” (Hoffman 1976) という論文である。ホフマンはその論文で、古典的な共感の捉え方、共感的な苦痛 (empathic distress) を特徴づける2つの具体例を挙げている。1つは養育者の緊張が子どもに対して身体的に転移される例で、もう1つ、より一般的な例が挙げられている。該当する箇所を引用しよう。

A second, more general, paradigm holds that the unpleasant affect accompanying one's own painful past experiences is evoked by another person's distress cues which resemble the stimuli associated with the observer's own experiences. A simple example is the child who cut himself, feels the pain, and cries. Later on, he sees another child cut himself and cry the sight of the blood, the sound of the cry, or any other distress cue from the other child associated with the observer's own prior experience of pain can now elicit the unpleasant affect that was initially a part of that experience (Hoffman 1976, p.126).

このようにホフマンの挙げた例は、自分自身の過去の苦痛を伴った体験と類似する (resemble) 他者の刺激に誘発されて、不快な感情が呼び起こされるというものである。具体的には、怪我をして痛い思いを経験したある子どもが、人が怪我をして泣き叫んでいるのを観て、同じように不快な感情を呼び起こすという例が挙げられている。この共感の捉え方に対して、Gilligan and Wiggins (1987) は「共に感じること」という語を用いて以下のように反論する。

Our interest in co-feeling lies in the implication that such feeling develop through the experience of relationships which render other's feeling accessible. The distinction between co-feeling and empathy is that empathy implies an identity of feeling — that self and other feel the same, while co-feeling implies that one can experience feelings that are different from one's own (Gilligan and Wiggins 1987, p. 289).

ここでギリガンとウィギンズは「共感 (empathy)」と「共に感じること (co-feeling)」という用語を対比的に用いている。「共感」は自己と他者が同じ感じを共有するものであり、「感じの同一性 (an identity of feeling)」を含んでいる。それに対して、「共に感じること」という語では自身の感情とは異なる感じを体験できる、ということを示唆している。「共に感じること」は、自身の体験と類似する他者の体験を共有するという意味での「共感」とは異なる意味で用いられており、「共に感じること」が従来の古典的な発達心理学で言われていた「共感」とは異なるということがわかる。ただ、この「共に感じること」という言い回し自体は、実はギリガンらが自ら提案したものではない。上記の引用箇所の手前で、ある小説の一節が引用されており、その小説の中に“co-feeling”という言い回しが登場するのである。

3. 「共に感じること」と「同情」

ギリガンとウィギンズは、上記の引用箇所の前頁で倫理の発達に関する諸問題を整理したのち、“these problems of interpretation are illustrated clearly by the discussion of the word “compassion” in Milan Kundera's novel, *the Unbearable Lightness of Being* (1984)”と記述している。チェコスロバキア出身の作家ミラン・クンデラ (Milan Kundera) の小説 *the*

Unbearable Lightness of Being (邦題『存在の耐えられない軽さ』)は、時に哲学的な断章を交えながら物語が展開していく。ギリガンらが引用したのは、英訳版の第1部、主人公のトマーシュが、行きずりの関係となったテレザに対して抱いたある種の同情 (compassion) について、その語源について注釈しながら、もの思いにふけている場面である。

ラテン語から派生した言語において “compassion” は “com- (共に)” という接頭語と “passio (苦しみ; suffer)” という語根から成り立つ。そのような諸言語では「同情という言葉は、人は他者の苦しみを冷静な心でみていることはできない、言い換えると、人は苦しんでいる者に共感を持つ (Kundera 1984)」ことを意味し、同情によって誰かを愛するなど本当の愛ではない。しかし “compassion” を意味する言葉がその語根に “passio” ではなく、例えばフランス語の *sentiment* (英語では *feeling*) から成り立っているような諸言語では、同情という語はより広い意味を持つことになるという。クンデラは小説の中で、以下のように記述している。この箇所は、ギリガンとウィギンズの論文でも同様に引用されている部分である。

The secret strength of its etymology floods the word with another light and gives it a broader meaning: to have compassion (co-feeling) means not only to be able to live with the other's misfortune but also to feel with him any emotion — Joy, anxiety, happiness, pain (Kundera 1984, p.20).

引用の通り、ここで「同情 (compassion)」のパラフレーズとして「共に感じること (co-feeling)」という言い回しが用いられている (原文の仏語版では “compassion (co-sentiment)” と表記)。ここでは、「共に感じること」が、他者の不幸と共に生きるということのみならず、

その人のあらゆる感情、喜びや不安、幸福や苦痛など、あらゆる感情を共に感じるということの意味しており、クンデラのいう「共に感じること」とは、他者と共に、苦痛のみならずあらゆる感情を生きることを指す概念であることがわかる。

4. 本節のまとめ

Gilligan and Wiggins (1987) では、クンデラの「共に感じること」の概念を援用しながら、“Yet the idea of co-feeling goes against prevailing assumptions about the nature of the self and its relation to others, since co-feeling implies neither clear self-other boundaries nor a merging or fusion between self and other, so that one or the other disappears (さらに、共に感じることという着想は、自己と他者への関係の本質に関する支配的な仮説に反している。なぜなら、共に感じることは、明確な自己と他者の境界も、または自己と他者の融合や一体化によりどちらか一方が消失することも含んでいないからである) (p.288-289, 筆者訳).” と論じている。この「共に感じること」という概念が、本論文冒頭の引用にある「全ての認知が前もって存在するパターンやユニットから成り立つと想定される西洋の理論 (Gendlin 1995)」とは異なった発想である、「交差」の概念についての主張とその論旨が共通していることは明らかである。さらにクンデラが提案した「共に感じること」という発想に関して、ギリガンとウィギンズは、自身らの観点から以下のように捉えている。

Through co-feeling, self and other, whether equal or unequal, become connected or interdependent. (…) Conversely, co-feeling does not imply an absence of difference or an identity of feeling or a failure to distinguish between self and other. Instead, co-feeling implies an awareness of oneself as capable of

knowing and living with the feelings of others, as able to affect others and to be affected by them (Gilligan and Wiggins 1987, p.290).

引用のように、ギリガンとウィギンズは「共に感じる」という発想を人々がより繋がり相互依存的になる (become connected or interdependent) ことに貢献するものと捉えており、さらに「他者の感覚を共に知り共に生きるという能力、そして他者に影響を与え、他者から影響を与えられようという自身の認識」を含んでいると捉えている。元々、クンデラによって「同情」のパラフレーズであったこの「共に感じる」という言い回しは、ギリガンとウィギンズによって「共感」という用語と対比的に用いられ、上記のように他者との相互的な関わりに関する重要な用語として位置づけられることになった。さらにジェンドリンはこの「共に感じる」とに関する議論を脚註で引用し、対人的な相互関係における「交差」の特徴を提示するために援用したのであった。しかし、ギリガンとウィギンズが「共に感じる」と対比させた「共感 (empathy)」は、あくまで道徳性の発達に関する心理学におけるものである。では、心理療法における「共感」と、対人的な相互作用における交差や「共に感じる」という発想のあいだは、どのような関係を見てとれるのだろうか。

Ⅲ 「交差」概念から見た「共感」概念

1. ロジャーズによる理解としての「共感」と“as if quality”

カール・ロジャーズ (Carl Rogers) による「共感的理解」という用語は、“empathy”の形容詞形“empathic”と動名詞“understanding”という語を組み合わせたものであるが、「共感」の方よりも「理解」に重きをおく捉え方がある。例えば、岡村 (2010) は共感的理解について「理

解の様式が、共感」(岡村 2010 p.17) と強調し、共感的理解を「『内側からの』理解、『相手の立場にたった』『相手の眼差しに立った』理解」(岡村 2010 p.17) と形容しており、小林 (2010) も同様に「『共感的理解』という理解のあり方」あるいは「理解の仕方」という言い回しを用いる。この「理解の様式」や「理解のあり方、仕方」を形容する「共感的」という性質に関連しているのが、ロジャーズによる“as if quality”という用語であろう。Rogers (1959) は、共感 (empathy) を説明するなかで以下のように論じている。

Thus it means to sense the hurt or the pleasure of another s he senses it, and to perceive the causes thereof as he perceive them, but without ever losing the recognition that it is *as if* I were hurt or pleased, etc. if this “as if” quality is lost, then the state is one of identification (Rogers 1959, p.211).

ロジャーズのいう共感とは「他者の苦しみや喜びをその人が感じているように感じ、その原因もその人が知覚しているように知覚すること」であり、この時点で、ロジャーズの共感とはクンデラのいう「共に感じる」とも共通している。また、ロジャーズの共感で重要なのは“as if”という性質を失わないことであり、「もしこの“あたかもかのように”という性質がなくなるならば、それは同一化の状態である (if this “as if” quality is lost, then the state is one of identification.)」と指摘されている。この一文からも、ロジャーズの共感とは Hoffman (1976) が提示し Gilligan and Wiggins (1987) が“empathy implies an identity of feeling (Gilligan and Wiggins 1987, p.289)”と批判した、同一化に基づく共感とは異なるものであることがわかる。“as if”という性質を伴うことで、共感的理解は、同一化に基づく他者の体験の理

解とは異なった特徴を有する理解であることが強調されているのである。

2. フロイトによる「共感」についての記述と「同一化」

次に取り上げたいのは、ジークムント・フロイト (Sigmund Freud) による共感 (empathy) への言及についてである。Freud (1921/1955) は他者との同一化 (identification) について、特に集団の指導者との同一化を論じるなかで共感について触れている (言及は2箇所あり、うち1つは原註)。フロイトは “... we are faced by the process which psychology calls ‘empathy [*Einfühlung*]’ and which plays the largest part in our understanding of what is inherently foreign to our ego in other people. (私たちは心理学が「共感」と呼ぶプロセスに直面しているものであり、それは他の人たちの中にある、私たちの自我にとって本質的になじまないものを理解する上で最大の役割を果たす) (Freud 1921/1955, p.108, 筆者訳)” と記述しており、また脚註部分では “A path leads from identification by way of imitation to empathy, that is, to comprehension of the mechanism by means of which we are enabled to take up any attitude at all towards another mental life. (同一化から、模倣を経て共感に到るまで、一本の道筋が通じている、つまり、他の人の心の生活に対して、そもそもあらゆる態度をとることを可能にするその機制についての把握である) (p.110, 筆者訳)” と論じている。フロイトは、他者が有している、自我にとってなじまない側面の理解 (understanding) に関して「共感」を取り上げるが、ここでは共感を防衛機制における「同一化」と関連づけている。これは、明確に共感と同一化を区別しているロジャーズの共感的理解のもつ発想とは対比的である。

また小林 (2010) は、ロジャーズの共感的理解と力動的な精神療法における「共感」の相違点の1つとして、力動的な精神療法における共感に

は「治療者自身に、共感の対象となっているクライアントの体験と、似たような体験が存在していることが必要 (小林 2010 p.88)」とされている場合があると指摘する。小林 (2010) は、成田 (2003) の「つまり私にとって共感とは『あーそうだったのか』という発見があってはじめて可能になるものであった。(中略)『そういう経験をしてきたのならそう感じて不思議はない』と私が感じられるには、私の中に患者と同様の、あるいは必ずしも同じでなくとも相似の (isomorphic) 経験がないと、『それなら不思議はない』とは思にくい。患者の経験と同系の (isomorphic) 経験を自分の中に見出したとき、はじめて患者の気持ちがわかったと感ぜられる (成田 2003 p.80-81)” という記述を、力動的な精神療法における共感の特徴づけるものとして例に挙げている。

前節 (II) で取り上げた、ホフマンの「共感」とその対比としての「共に感じること」という図式は、フロイトの「共感」とロジャーズの「共感的理解」においても、同一化への批判という点で同様に対比的な図式になっていることがわかる。それでは、この同一化をめぐる対比は、ジェンドリンの「交差」という発想からどのように捉えられるのだろうか。

3. 理解としての「交差」とメタファーの仮定性

ジェンドリンの交差 (crossing) という用語も、ロジャーズやフロイトの共感概念と同様に理解 (understanding) という語と関連づけて論じられる。例えばジェンドリンが “Crossing is an understanding, a sense of many implications at once. (交差とは理解であり、多くの含意が同時に伴う一つの感覚である (Gendlin 1997b, p.29, 筆者訳)” と指摘しているように、交差とは、何か新しい理解がもたらされる際その機能のことであり、またそのような言葉が意味を成す際の創造的な言語運用のことを指している (Gendlin 1995)。

また、この交差という状況についての創造的

な言語運用が顕著に示されている好例として、メタファー表現が挙げられる (Gendlin 1995)。ここでいうメタファーとは、例えば「タバコは時限爆弾だ (Gendlin 1995)」というような、ある対象を別の対象に喩えて表現することである。ジェンドリンは著作“*A Process Model*”において、メタファーについて“A metaphor is an evening, a focusing, a crossing (Gendlin 1997a, p.51)”というように自身の哲学概念との関連から説明するなかで、以下のように記述している。

How one devises (and understands) a metaphor can be used here as a metaphor for this point: It was long said that a metaphor is “based on” a pre-existing similarity between two different things. In our model it is the metaphor that creates or specifies the similarity. By speaking of A as if it were B, certain aspects of A are made which were not there before as such (Gendlin 1997a, p.52-53).

引用のように、ジェンドリンはメタファー表現をどのように作り出し、あるいは理解するのかについて、従来のメタファーの捉え方のような「前もって存在する類似性 (pre-existing similarity)」に基づくとは捉えてはいない。そうではなく、ジェンドリンの哲学 (プロセスモデル) の発想では、類似性を元にメタファーを作り出すのではなく、メタファーによってその類似性が創造されるのである。続いて、“by speaking of *A as if it were B*, certain aspects of A are made which were not there before as such. (A についてあたかも B であるかのように話すことで、その以前にはそこに存在していなかった、A についてのある側面が作り出される) (Gendlin 1997a, p.52、筆者訳、斜字リックと太字による強調は筆者)”と指摘する。先の「タバコは時限爆弾だ」の例で言えば、メタファーを作り手 (あるいは読み手) は、この“as if”

という性質を伴って、タバコを「あたかも時限爆弾のように見立てる (交差させる)」ことによって、タバコの持っている特徴や時限爆弾との共通点 (ex. 健康被害が出るまで潜伏期間があり、火をつけ徐々に燃えていき短くなっていく様子、さらには余命も短くなっていく、など…) が、メタファーを作り出した後にはじめて創造的に理解されることになる。メタファーの創造性は、ジェンドリンの論じている“A as if it were B”という理解の仕方によって、つまり交差によって促進されているのである。

この“as if”というメタファーの特徴に関連して、メタファーの意味が成立するための条件として、そのメタファーで言い表されている状況が、あくまでメタファーであるという認識が前提とされていなければならない、という点が指摘できる。例えば鍋島 (2016) は、「あの研究者は新しい畑を耕している」という表現を例に挙げる。この表現をメタファーと捉えれば、その研究者は新しい研究領域やテーマに取り組んでいるという意味となるだろうが、『あの研究者は新しい畑を耕している』と述べた際、家庭菜園が趣味の教授が別の場所に菜園を作ったと考えればメタファーではなくなる (鍋島 2016 p.97)」。また、その状況が「現実でないこと、あるいは現実でないことが話し手と聞き手にされていることはメタファーの必須条件である (鍋島 2016 p.97)」と述べられている。このような「違うと知りつつ、違うことをいったん忘れて」という性質を、鍋島はメタファーの「仮想性」と呼び、メタファー理解の条件の一つとして、この仮想性の条件を提示している (鍋島 2016 p.99)。「違うと知りつつ、違うことをいったん忘れて」という条件があるからこそ、“as if”という性質を伴った理解が成り立つ。メタファーによる理解とは、例えばタバコと時限爆弾を端的に同一視することではない。メタファーによって、2つの対象を仮想的に、つまり「あたかもかのように」という仕方で交差させることで、そこに新しい理解がもたらされるのである。

4. 本節のまとめ

本節では、心理療法における共感について、まずロジャーズの共感的理解とフロイトの共感についての言及を対比的に確認した。ロジャーズの共感において、その理解の様式として“as if”という性質が重視され、この性質が失われると「同一化」に陥ってしまう。一方で、フロイトは共感をまさに同一化と捉えており、自我にとってなじまない他者の体験や生活を理解する際の防衛機制として共感について言及した。また、力動的精神療法でも、患者の体験を共感するには治療者側に似たような体験が必要であると説明された。

フロイトや力動的な発想における共感は、同一化や自他の体験の類似性を前提としており、ホフマンの「共感」概念、つまり他者の体験に類似した体験が自身にもある限りにおいて共感が成立するという共通の特徴を持っている。一方、ロジャーズの共感についての捉え方は、as ifという性質、つまり自他のあいだで異なった体験や感情を理解することを強調する点で、むしろ、クンデラが「同情」のパラフレーズとして用い、ギリガンとウィギンズが援用した「共に感じること」という他者の理解の仕方と共通点を持っている。この「共に感じること」を、ジェンドリンは対人的な相互作用における交差に関連づけて論じ、そこで強調されているのが、異なる体験から新たに創造される「新奇性(novelty)」であった(Gendlin 1995)。ジェンドリンはホフマンの議論に対して、「あらゆる認知が前もって存在するパターンやユニットから成り立つ」という西洋の理論仮説の多くに見られる前提を見出し、批判した。

さらに「あらゆる認知が前もって存在するパターンやユニットから成り立つ」という発想への批判的観点は、ジェンドリンのメタファー論においても見られた(Gendlin 1995; 1997a)。ジェンドリンはメタファー表現を、前もって存在する(pre-existing)その類似性によって作られその意味が成り立っているとは捉えず、メタ

ファーによって表現されることで意味が新たに創造されると捉えている。メタファー表現とその理解とは、AとBという2つの対象のあいだに“as if”という性質を伴うこと、つまり「あたかもかのように」という仕方理解することで、そこにAについての新しい側面を見出すという創造的なプロセスであった。メタファーのこの仮想性により、メタファーは創造的な意味を有するが、この特徴をジェンドリンは「交差」という用語で捉えている。つまり、“as if”という資質を伴った理解の様式であるという点で、ロジャーズの共感的理解と、ジェンドリンの対人的相互作用における交差という理解の仕方には、ある共通の特徴を見出すことができる。

このように、ジェンドリンの指摘する対人的な相互作用における交差の概念は、自分自身とは異なる存在である他者の体験を理解するという営みを捉える上で、重要な示唆を含んでいる。では、ロジャーズの共感的理解とジェンドリンの対人的な交差を比較したときに際立つ、両者の発想の相違点は何であるか、あるいは対照的に、共感的理解と対人的な交差の2つをさらに「交差」させてみることで、そこからどのような新しい着想を得ることができるのか、というより探索的な考察に関しては、別稿に譲ることにしたい。

IV 結語

私たちが誰かに話をするを切望するのはなぜなのか。本論文冒頭に示したこの問いについて、ジェンドリンに依拠するならば、「それによって、私もあなたも未だ体験したことのない、新しい何かをもたらされるから」だと答えられるだろう。このような新しさ、新奇性をもたらす対人的な相互作用のことを、ジェンドリンは「交差」という概念を用いて捉えている。そしてその内実は、「共に感じること」、つまり他者の体験や感情を共に感じながら、さらにクンデラやギリガンらに即して言えば、共に生きながら、

新しい理解を創造していくことである。カウンセリングという行為や制度が「開発」されるはるか以前から、私たちは誰かと言葉を交わし、その誰かの反応を聴くという時間のなかで、それまでお互いに気づきもしなかった、自身の状況を進展させる全く新しい何かに出会ってきたはずである。

本論文では、この対人的な相互作用における交差について「共に感じること (co-feeling)」という用語を手がかりとした理論的検討を行った。対人的な相互作用における交差が、実際にどのようなプロセスであり、またどのように促進されるのか、その臨床的な意義をさらに探求する上で今後必要となる実践的研究に対しても、本研究が行った概念や発想の整理は、一定の貢献をもたらすと考えられる。

付 記

本論文を作成するにあたり、ご指導いただきました関西大学大学院心理学研究科の池見陽教授にお礼申し上げます。

文 献

- Freud, S. (1921/1955): Group Psychology and the Analysis of the Ego. Strachey, J. (Ed) *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, London; The Hogarth Press and The Institute of Psycho-Analysis. Vol.18, pp.65-143.
- Gendlin, E. T. (1995): Crossing and dipping : some terms for approaching the interface between natural understanding and logical formulation, *Minds and Machines*, 5(4), pp.547-560.
- Gendlin, E. T. (1997a): *A Process Model*. New York: The Focusing Institute.
- Gendlin, E. T.(1997b): How Philosophy Cannot Appeal to Experience, and How It Can. Language beyond Postmodernism: Saying and Thinking in Gendlin's Philosophy. Levin, M. (Ed) Evanston; Northwestern University Press, 3-41.
- Gilligan, C. and Wiggins, G. (1987): The origins of morality in early childhood relationships. Kagan, J. & Lamb, S. (Ed.) *The emergence of morality in young children*. Chicago, IL: University of Chicago Press.

- Hoffman, M. (1976): Empathy, Role-taking, Guilt, and Development of altruistic Motives. Likona, T. (Ed.) *Moral Development and Behavior*. New York: Holt Rinehart, and Winston. pp.125-143.
- 小林孝雄 (2010) : 共感 岡村達也・小林孝雄・菅村玄二 (著) *カウンセリングのエチュード 反射・共感・構成主義 第2部* 遠見書房 pp.69-145.
- Kundra, M. (1984): *The Unbearable Lightness of Being*. New York: Harper and Row.(西永良成 (訳) (2008) : 存在の耐えられない軽さ (池澤夏樹 = 個人編集 世界文学全集 1-3) 河出書房新社).
- 鍋島弘治朗 (2016) : *メタファーと身体性* ひつじ書房.
- 成田善弘 (2003) : *精神療法家の仕事一面接と面接者* 一金剛出版.
- 岡村達也 (2010) : 「理解すること」から「いまここに—いること」としての「反射」へ 岡村達也・小林孝雄・菅村玄二 (著) *カウンセリングのエチュード—反射・共感・構成主義 第I部* 遠見書房 pp.9-67.
- Rogers, C. (1959): A theory of therapy, personality and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework. In S. Koch (Ed.) *Psychology: A Study of a Science, Vol.III: Formulation of the person and the social context*. New York: McGraw-Hill, 184-256.